



週報

2017~2018年度 RI会長 イアン H. S ライズリー
RIのテーマ 『変化をもたらす』
地区のテーマ 『RI 戦略計画を皆で一緒に実行しよう!!』 かけー 細井保雄

国際ロータリー
第2570地区

狭山中央ロータリークラブ

〔例会場〕 狭山東武サロン〒350-1305 狭山市入間川 3-6-14 TEL 04-2954-2511
〔事務所〕 〒350-1305 狭山市入間川 1-24-48 TEL 04-2952-2277 FAX 04-2952-2366
[http : //www.schuohrc.org](http://www.schuohrc.org) E-mail : schuohrc@pl.s-cat.ne.jp
会長 益子伸明 会長I/O 清水幸彦 副会長 松浦法子 幹事 浜野貴子

第3グループ内の例会日] 新狭山(月)、入間(木)、入間南(火)、飯能(水)、日高(火)、狭山中央(火)
所沢(火)、新所沢(火)、所沢西(火)、所沢東(木)、所沢中央(月)

第1170回(2月27日) 例会の記録

点 鐘 益子伸明会長
合 唱 手に手つないで
第2副SAA 東会員 江原会員

※出席報告

会員数	出席者数	出席率	前回修正
30名	27名	88.46 %	96.15%

パスト会長の時間

江原伸夫パスト会長

こんにちは。三年前の7月7日に会長として初めてこの場所に立った時、そして何よりも「会長の時間」という言葉の重みに緊張で手足が小刻みに震えていたように記憶しておりますが、あれから二年半、今回は「パスト会長の時間」という更に重厚感のある響きに、今もあの時と変わらぬ緊張を感じています。宜しくお願ひ致します。

最初にプライベートな事ですが、亡くなられたパスト会長の實積克彦先生が最後に自分の事業として楽しみにしておりました「福寿の里」(特別養護老人ホーム)が完成しました。3月1日(金)オープンという事で、詳細が埼玉新聞に掲載されました。案内のパンフレットがございますので、どうぞご覧になってください。

私が浦和から日高市の武蔵台に越してきてから既に40年近くになります。当時はまだ高麗駅の朽ち果てた駅舎が線路脇に残っており、近隣の方からは『つい最近までよく猪が下りてきていた』とのお話を伺ったことがありました。勿論、私が越した頃には猪を見ることはありませんでしたが、当時の朝は「コゲラ」の木をつつく音で目が覚め、庭に目をやると「キジ」や「山鳩」のつがい、「コジュケイ」の親子などを見かけること



も多々ありましたし、通勤道路では「タヌキ」などのけもの道を横切る動物が事故に遭ったりしていました。最近ではそのような光景は目にする事もなく、今の住環境からは随分と昔の話のような気がします。

前振りでこのようなお話をしましたのは、代々高麗駅近くに住んでいらっしゃる、80代後半になってはいらっしゃるかもしれませんが、見識も深く、地域の新聞(文化新聞?)などにも投稿をされている方から伺ったお話をさせていただこうと思ったからです。

その方とはたまにお会いする機会があり、お会いした時には趣味の話から戦前の幼少期・戦時中の青年期・戦後の復興と共に生きてきて現在に至るまでの御自身が経験してきた事柄など、毎回違う話をして下さいますので、私もついつい聞き入っている次第です。

戦時中の交通事故に遭った時・昭和20年7月マスタングP51のパイロットと目が合った時・戦後にアメリカ兵の銃撃にあった時・学徒勤労報国隊に従事していた時等々、興味深い話がある中でも、特に面白く聞かせていただいたのが「狐の嫁入り」と「送り狼」の話でした。全ての話の中には個人名や現存する建物や場所が含まれているのですが、この二つの話は、その現象の起きた場所が自宅に程近い巾着田周辺で、その方の真顔で一生懸命に話して下さるのと相まって、それがまた想像と現実との狭間で余計に印象に残り、投稿された新聞のコピーをくださるようお願いし、意味や由来を再確認したほどでした。今日はその方の投稿された内容をもとに記憶をたどりながら、その方になってお話をしますので宜しくお願ひ致します。

私が小学校4年生の時だから、昭和15年頃に経験した本当の話です。当時は武蔵野線と言って、飯能から先は吾野線と言っていたころです。高



麗駅に程近い母の実家へ一人でよく泊まりに行っていました。ある夜の事です。まだ辺りが暗くなって間もない頃に、母の弟のAさんが私に「いいものを見せに連れて行ってあげる」と言うので何を見せてくれるのかと楽しみに後を付いて行くと、巾着田の西寄りの川の下り口のところから見て、(※よくわからなかったので今のどの辺りか目安となる場所を伺ったところ)今のドレミファ橋の崖の上辺りで、それはそれはほのぼのとした色の提灯が15個位(※どの位の大きさですかと伺ったところ)その大きさは直径40~50cm程のオレンジ色掛かった薄赤色の提灯が、ゆらゆらゆらと揺れながら、ドレミファ橋の崖上を東から西へ、そろそろと動いていくのです。Aさんは「声を出したり音を出したりしたら逃げちゃうから静かに見ているんだぜ」と言われたので、じっと息を殺して見ていたら、西の提灯が一つ消えると東から提灯がポコッと現れる。あの提灯のほのぼのとした色が、ぐるぐるぐるると限りなくいつまでも続き、それは誠に見事な提灯行列を、只々いつまでも見とれていたことが(※おおよそ30分前後だと思ふ)未だに脳裏の片隅に焼き付いており、鮮明に思い出されますし、懐かしくも思っています。

現在の曼珠沙華群生地雑木林もドレミファ橋もその当時はありませんでしたが、日高市内に住む他県(長野)から越して来られた私と同年代の方もやはり、昔、「狐の嫁入り」を見たという人が居るんですよ。科学的な話になってしまうと夢もなくなってしまいますが、私は今でも見たものを信じているんです。

そして「送り狼」の話もその方の投稿文で紹介致します。



平成初年度の頃、私が日高市台のBさん宅に伺った時のことです。奥様との要件が終わったの余談から興味深い話を聞きました。

大正の初め頃、勿論、電車も通っていません。自転車もない頃、奥様の義父が吾野に用事があって朝早くに出掛け、帰りも夜遅くなったとのこと。

翌朝、義父が起きると、狼の吠える声が裏の方から聞こえてきました。義父は直ぐ、ピンときたそうです。昨夜、吾野からついてきた狼が裏の古井戸に落ちて吠えていることに気付き、古井戸を覗いて「今、出してやるからな」と言って長椅子を下ろし、びしょ濡れの狼を背負い、井戸から助けだしました。「もうこの井戸には落ちるなよ」と言って肩から狼を下ろすと、狼は大きく身震いをして立ち去ったそうです。

そうして翌朝、玄関の戸を開けると、そこには兎が一羽置いてあったとのこと。狼が助けてもらった御礼に兎を一羽持ってきてくれたことに気が付きました。Bさん曰く、昔から人間と狼は互いに助け合いの関係が出来ていたそうです。

この二つの話を、この方はこう記していました。

今思えば昭和15年頃、とにかく狐が多く生息していた、狐に化かされた人も多はず。あ、これは狐に化かされたなど気づいたら、すぐ煙草に火を付けるんだそうです。ところが狐はすぐそばに来て、マッチの火を吹き消すとのこと。やっとの思いで煙草に火を付けると狐は何処かに去って行き、家に帰れたとの話も聞きました。

狼が人間を送ってくれば狐は人間に近寄れず、従って狐に化かされずに済んだ、と云う訳です。

以上がこの方から伺ったお話と投稿文の内容なのですが、「狐の嫁入り」については、私も子供の頃から祖父母をはじめ、近隣のお爺さんお婆さんなど、多くの大人からよく聞いていた話なので(20歳位の歳の差で)その現象を実際に経験されていたことに、驚きと共に羨ましくも感じました。只、「送り狼」の話は想像していた話とは違っていました。大分前にインドの女の子が狼に育てられたという話が大きなニュースになったように、元々、狼という動物は感情豊かで愛情を注いでくれた人を決して忘れない、犬よりも人間にとって近い動物だそうです。

私もそれぞれの意味を調べてみましたが「狐の嫁入り」は大体想像通りでしたが、それに反して「送り狼」と云う言葉は殆ど良い例えに使われていませんでした。ニホンオオカミが絶滅してしまった今、確認する術は少なくなりましたが、先程述べたことが狼の本来の習性だとすれば、大正初期の経験話にも全くの作り話とは思えず、自分の年齢から思うと二つの話は凄く近い時代の話として夢のあるものに思えました。

因みに現代でも「送り狼」には義理堅く感情豊かな狼もいるかもしれませんので、女性陣にも良い狼を見分ける目を養っていただきたいと思います・・・

以上

幹事報告

浜野幹事

- 『地区役員・委員の委嘱について』
地区戦略計画委員会委員: 田中八東会員
社会奉仕部門地域社会奉仕委員会委員長: 益子会員
- ・訃報 2011-12年度 入間P会長 山根宏夫様
(享年 82歳) 葬儀: 2月20日(火)
- ・例会変更 所沢RC 入間南RC 入間RC

委員会報告

・R情報・雑誌委員会 菊田委員長

【横書】

- p21 視点 皆で斉唱「ロータリーを他人に告げる歌」
- p27 ポリオについて

【縦書】

- p4 戦線からの生還・開拓・奨学金
- p8 日本に感謝 ミャンマーに感謝
- p13 未来予想図を描かせるハッピーな出来事
- p21 なぜ世界は日本化するのか

「会員卓話」……

『日ユ同祖論の基本構図』

古谷 博会員



今から2900年前、ユダヤ(イスラエル)民族は2つに分裂し、2部族がエルサレムを首都とするユダ国を、10部族がサマリアを首都とするイスラエル王国を築きました。それから約2世紀の後、紀元前722年に北のイスラエル王国はアッシリア帝国によって滅ぼされるとともに、その部族はアッシリア人によって連れ去られ、歴史の中に消えてしまった。これが有名な失われた10部族とされています。

一方、南のユダ王国はバビロニア人によって滅ぼされ、前597年にユダ王国の人達がバビロンに連れて行かれました。これが「バビロンの虜囚」と呼ばれる事件です。彼らは10部族が連れ去られた方角へ行ったわけですが、その頃には10部族は消息を絶っていたと言われています。バビロンの虜囚は後にペルシャ人によって解放されたそうです。

10部族が消え失せてから2700年後、バビロンの虜囚の子孫の一人だと、自らを位置づけるイスラエル共和国の人、ヨセフ・アイデルバーグは失われた10部族の行方を突き止めようと探索の旅に出て、遂に世界の東の果てまで行きついてしまったのが日本です。

もともと日本人は訪れたヨーロッパの人達に最初から深い印象を与え、彼らによって日本人の祖先はイスラエルの失われた10部族とされたのです。これが日ユ(日本人・ユダヤ人)同祖論の基本的な構図だそうです。

“最初から”とするのは、開国ほどない明治期に既にマックレオドがこの説を唱えているからで、アイデルバーグはその一連の人達の後継者にすぎません。

マックレオド以来、彼らは日ユ同祖論を数々の事象をその証拠としてあげますが、その思いの深奥にあるものは、日本がユダヤ人が心の中に抱く失われた部族像にぴったりの、2つの際立った特徴を持っているからだと言われています。

まず、ユダヤ人は失われた10部族がキリスト教やイスラム教徒になっている状態で発見されるのを望んでおらず、「神道」という彼らにとって謎の宗教によって支配されている日本が、キリスト教徒の割合はいわゆる先進国の中では最低でありゼロに等しいため、彼らの信ずる失われた10部族はいつか、どこからか必ず姿を現すという考えに結びつき、部族は消え失せたのではなくて隠れているのであり、大きいけれども目に入らない存在であるらしいのです。

ニコニコボックス

- 益子君 本日の会員卓話 古谷P会長のお話し楽しみにしていました。宜しくお願いします。パスト会長の時間 江原P会長、宜しくお願いします。
- 浜野君 古谷P会長、会員卓話楽しみにしていました。宜しくお願い致します。本日の会長の時間 江原P会長、宜しくお願い致します。
- 江原君 古谷P会長、本日の会員卓話の時間を楽しみにしておりました。宜しくお願い致します。
- 古谷君 本日の卓話宜しくお願い致します。耳ざわりの点有りましたらゴメンなさい！
- 小島君 パスト会長の時間の江原P会長、会員卓話の古谷P会長、お話し楽しみにしていました。宜しくお願い致します。
- 松浦君 江原P会長、会長の時間宜しくお願い致します。本日の卓話の古谷P会長、楽しみにしていました。宜しくお願い致します。
- 宮岡君 古谷さんの卓話楽しみにしています。又、今月は欠席することが多く申し訳ありませんでした。
- 清水君 本日の会員卓話 古谷P会長、宜しくお願い致します。

◆次の例会

・3月13日(火) 12:30～

第二副SAA : 稲見会員 片山会員

外来卓話 : (医)尚寿会 理事長

大生病院院長

寶積英彦様